

伊藤整と

6月に行われた記念講演会。本学210番教室で講演する伊藤礼氏。



伊藤整百年祭

伊藤 礼（整 次男）

六月、小樽の方々、亡父伊藤整生誕百年の記念行事を企画して下さった。展示会、講演会、シンポジウムなどである。私も招かれてその一部分に参加させていただいた。どの行事にも人々が賑やかに集まってくださり、これは小樽文学館関係者、小樽商科大学関係者など、主催者の熱意と努力を知っていた私には嬉しいことであった。

行事のひとつ、小樽商科大学の展示会には二日間て三百人の入場者があったと関係者が喜んでくださったという。その話が、シンポジウムの後、ホテルに戻ってから講師たちのお茶の会で話題になった。私も含め、東京から来た講師たちは、三百人で喜ぶという話にやや怪訝顔であったが、これは講師のひとり、紅野健介氏の分析によって氷解した。つまり小樽市における三百人というのは、人口が百倍の東京都にあててみると三万人になる、と紅野氏はおっしゃるのであった。そうだとすれば、大盛況だったと言うのは間違いないことであった。

亡父の生誕百年は、没後で数えると三十六年である。いつの間にか時間が経ってしまった。今回の「生誕百年」という言葉は私を楽にしてくれた。「百」という数字の魔術なのだろう。父はすっかり枯れてしまい、浮世のざわめきから遠い向こう側に完全に移転してしまった、という感じが心のなかに広がってきた。「なにしろもう百年だからね、浮世と繋がるような生身の部分はなにも残ってないよ」という気持ちである。

したがって、今回の行事で、私は何回か皆様にも「有難うございました」とお礼を言ったが、亡父はもう私とか家族という浮世とは繋がっていないのだと一方で思うので、私の口からそういうことを言うのは、ほんとうは筋違いだ、滑稽だ、と複雑な気持ちにもなったのであった。

今回の「生誕百年祭」は、故郷の人々が伊藤整を、故郷の文学者として誇りに思っていてくださった祭りだった。伊藤整は、故郷の人々のものであった。その点で、伊藤整について何かこういことが東京で行われるのとは違った意味の祭りなのだ。亡父は故郷を去ってから殆どすべて東京の人であった。それがまた故郷に戻ったのであった。（了）



整に抱かれた礼氏
(昭和12年頃・伊藤 礼氏所蔵)

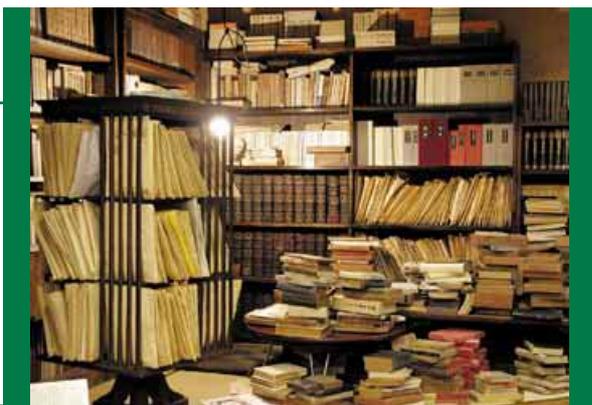
特別展「伊藤 整展」

平成17年6月18日（土）～8月28日（日）9:30 - 17:00

会場：市立小樽文学館

〒047-0031 小樽市色内1-9-5 TEL 0134-32-2388

文学館では「伊藤整氏の仕事場」として、昭和30年代初めころの伊藤整自宅の書齋が、当時の写真やご遺族の証言などを参考に再現されている。



小樽高商の描写

小説

- 『青春』 / 「全集」第2巻 新潮社
(または「作品集1」河出書房)
- 『少年』 / 同 第6巻 同
- 『若い詩人の肖像』 / 同 第6巻 同
(または新潮文庫)

随筆

- 『文学的青春伝』 / 同 第23巻 同
- 『小樽』 / 同 第23巻 同
- 『小樽商科大学』 / 同 第24巻 同



没前1年、久我山の書齋(昭和43年)



「チャタレイ裁判」第一審判決前
(昭和27年1月18日・小山久二郎 右 と)